

板橋駅西口駅前広場再整備計画

えん の もり



えん の もり

ここ板橋は江戸時代より日本橋から数え
中山道第一宿として栄えてきました。

人々が往来し、人と人が出会い、
様々な「もの」や「こと」が
縁あって結びつくところ。

涼やかな緑とともに人を見守り、
人を清らかにし、人に生気を
与えてくれるところ。

「ここへ来れば、気持ちが晴れる。」

「ここを通ると、気持ちが洗われる。」

板橋の玄関として、

多くの人にそう思われ

慕われていく場所でありたいと思います。



板橋区の玄関口のリニューアルに向けて、駅前のエリア全体を「えんのもり」と名付けました。人々が出会う宿場町としての歴史、縁がつながり新しいものに出会える学びの場、杜のようなみどりいっぱいの空間、地域の活動やまちの見守りといっためざすべき場所のイメージをネーミングに込めました。

森・環境・まち

約68万人近い人々が通勤通学で訪れる駅前は、区が今後取り組んでいられる豊かな環境を育て、守って共に維持し、高めていきます。まあるい仕組みをつくり、職能を含めて人々の暮らしを支える。板橋区の玄関口という立地を活かし





づくり

通過する埼京線。その車窓から見える森のような豊かな緑に包まれ、「緑によるまちづくり」を体現する場所になります。新たに生み出していくために、行政と再開発とが役割を分担しながら、場所の価値を、区民が義務感なく、自由に、この場所を活用し、手入れに参加できるように育てることで、地域産業を継続させるきっかけをつくります。板橋区、区のまちづくりを展示する場をめぐします。



地域活動・見守り

新しい駅前広場は、車中心から人中心の安全で、居心地のよい空間へとリニューアルします。新旧のコミュニティをつなぎ、「むすびのけやき」を中心に、地域活動による活気溢れる駅前をめざします。4F公益エリアと運動した活動の拠点駅前広場内にも設け、周辺の商店街、町会、再開発と地域のお祭りなどでの連携も進めます。また、新しい駅前広場は、常日頃から人目があり、見守りされているような安心感のある場をめざし、幼児から高齢者、身体障がい者、生物、植物まで、誰もが自由にアクセスできる場所をめざします。



学び（縁・出会い）

板橋口地区4Fに整備される公益エリアは、駅前広場や既存施設、再開発と連携した施設で、目的ごとに空間を設けるのではなく、マルチファンクショナルなオープンスペースをつくり、テーマに合わせて空間を可変させることで、常に新しさがあり、マルチファンクショナルなオープンスペースをめざします。ホールでの会議や学会での利用はもちろん、地域の方々が講師になった“人と出会う”ミニレクチャーなど、学びにつながるような地域活動を支えるとともに、小・中・高校生たちが日常的に勉強する場所としても利用できる設えにしています。



まちの課題解決

車中心から人中心へ、駅前広場の更新を行います

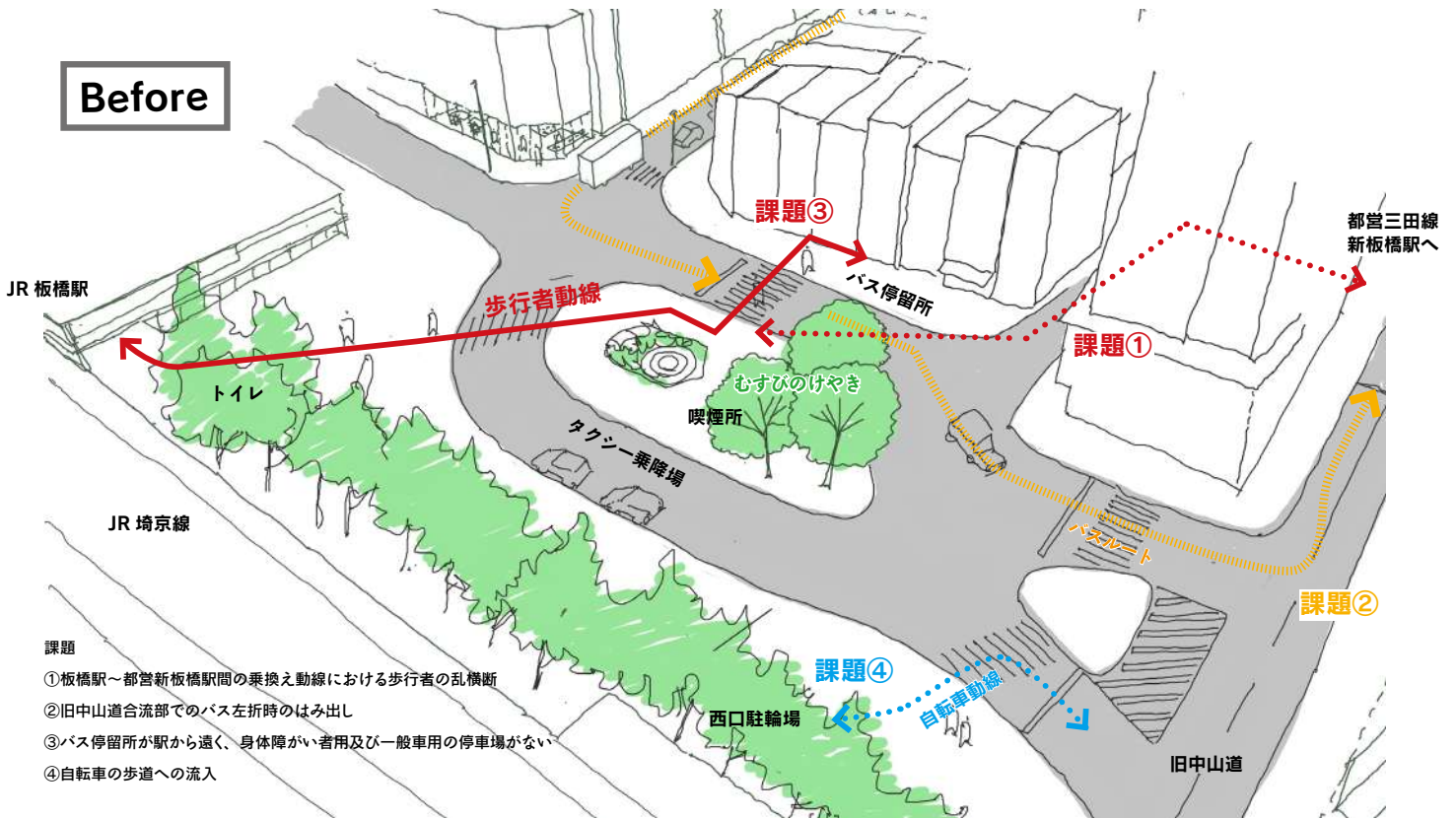


図1 | 現在の駅前広場

板橋駅西口の駅前広場は、昭和43年頃に献木されたシンボルツリー「むすびのけやき」とともに、区民の皆さまに親しまれてきました。しかし近年、ゲリラ豪雨や首都直下型地震等の都市型災害のリスクが高まり、また、人口減少やコロナ禍を経て価値観が変化の中で、自動車交通をさばくことを意図した「車中心」の空間から、居心地の良い日常空間でありながら災害への備えを持つ緑豊かな「人中心」の駅前広場へと更新していくことが求められています。

現状の主な課題としては、①JR板橋駅～都営三田線新板橋駅間の乗換え動線における歩行者の乱横断、②旧中山道合流部でのバス左折時のはみ出し、③バス停留所が駅から遠く、身体障がい者用及び一般車用の駐車場がないこと、④自転車の歩道への流入などがあります。

これらの課題の解消や、今日的な社会ニーズへの対応に向けて、現況の交通量調査、地元の方々へのヒアリング、交通事業者・交通管理者との協議、区民の皆さまとのワークショップでの意見を元に、安全で利便性が高く、居心地の良い駅前環境を実現すべく、再整備計画を策定します。



図2 | 板橋駅西口周辺エリアの交通計画上の位置づけ



図3 | 道路内の乱横断の様子



図4 | 旧中山道部のバス左折時の様子

デザインコンセプト

緑の中でおおらかに混ざり合う駅前広場

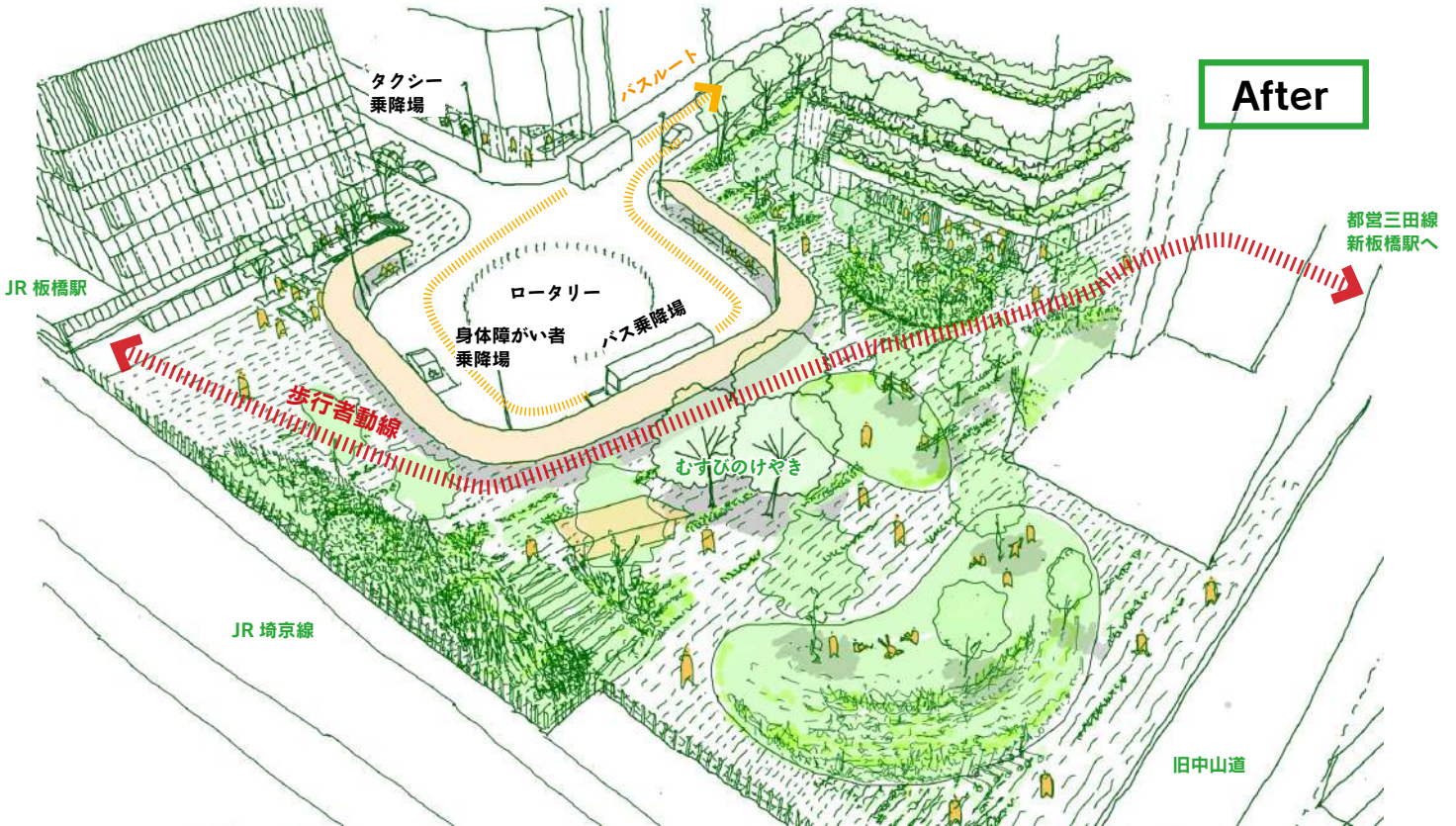


図5 | 新しい駅前広場のコンセプトスケッチ



図6 | これまでの駅前広場の「車中心」の考え方



図7 | これからの駅前広場の「人中心」の考え方

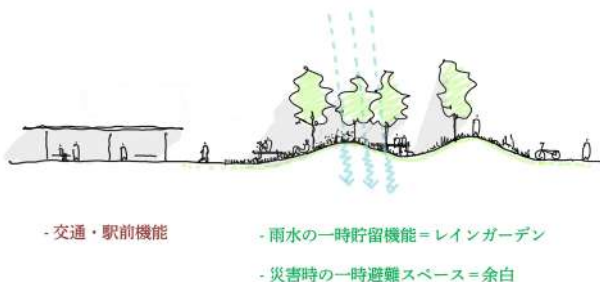


図8 | これからの 駅前広場が果たすべき役割

新しい駅前広場は、人中心の駅前広場です。これは地区計画の目標として定められた「緑豊かな環境」を駅前広場で実現するものです。豊かな緑の整備が循環型社会のシンボルとなり、同時に都市型災害に対する地域レジリエンスを高めるように、2つの再開発事業と一体となったインフラ整備をめざします。

豊かな植栽計画に合わせて、広場全体が地域活動の受け皿となり、地域コミュニティ醸成の場となっていくために、キャンピー（庇）により夏場の涼しい滞留空間を確保し、再開発の商業施設と連携した庇空間の整備を行っていきます。また、情報の整理についても力を入れていきます。駅間移動のわかりやすさを向上させる案内誘導サイン、中山道の歴史を伝える街道サインなど、利用者の目線で使いやすい空間整備をめざします。

交通機能の改善だけでなく、誰もが快適に、時に一人でも静かに過ごすことができる快適な空間に生まれ変わる駅前広場は、新しい時代に向けた先駆的な取組となるでしょう。

区民の創造的な活動があふれる空間が、人と人とのつながりを育み、創造都市をめざす板橋区の玄関口にふさわしい、駅前広場を実現していきます。

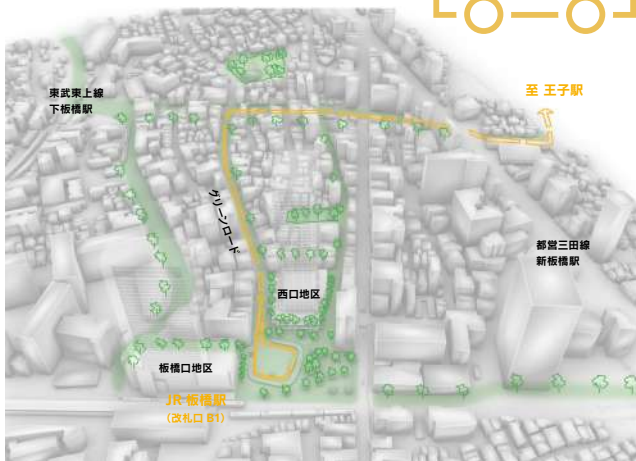
交通ネットワーク

3駅が近接する好立地を活かした 交通利便性の高い人中心のエリアへ

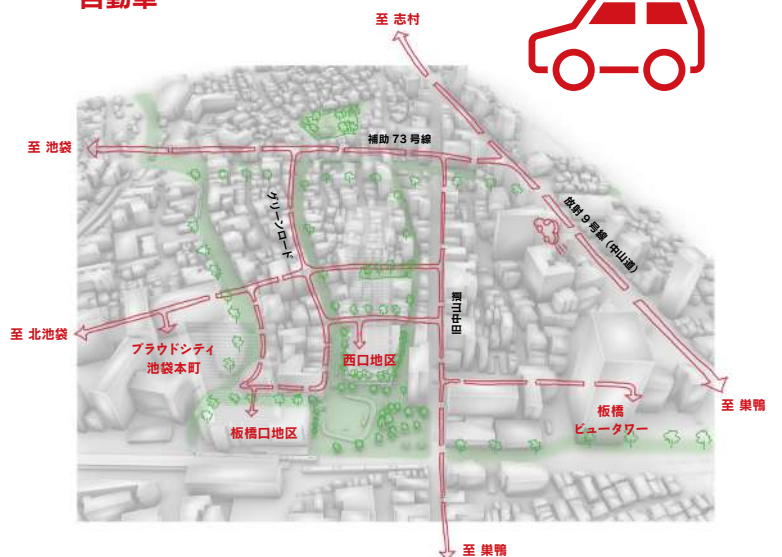
板橋駅西口周辺エリアは、都心からもほど近く、JR 埼京線板橋駅、都営三田線新板橋駅、東武東上線下板橋駅という3駅に囲まれています。その好立地を生かし、交通と緑のネットワークをつくることで、「人中心」の緑豊かで楽しく歩ける先進的なまちをめざします。

西口駅前広場の再整備により、バスは旧中山道を通さずグリーンロードで出入りする動線へと変更し、公共交通の軸とします。また、旧中山道側から西口駅前広場への車道の接続をなくすことで、自動車の通過交通を駅前から排除します。さらに、西口駅前広場に設置されていた駐輪場を再開発ビル内に整備予定の駐輪場へ集約し、西口駅前広場の外縁部にモビリティポートを配置することで、自転車の駅前広場内への流入も防ぎます。これらの取組により、板橋駅西口周辺エリアを、将来的に歩行者優先の安全で交通利便性の高いエリアとしていきます。

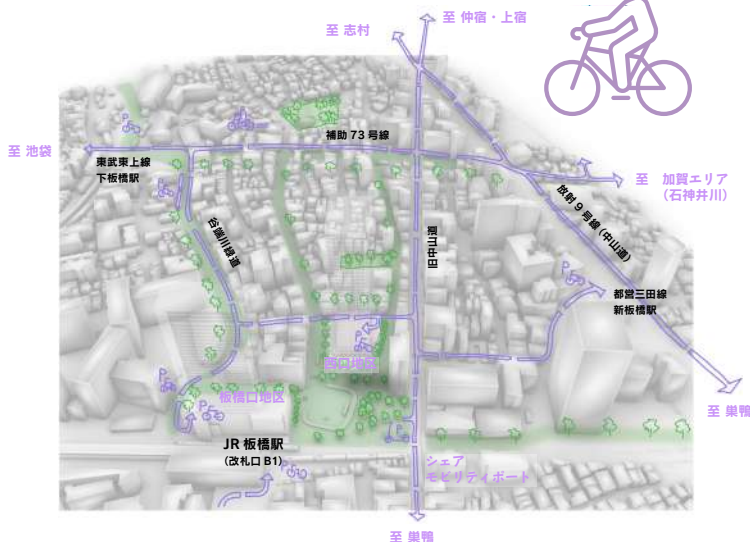
公共交通（バス）



自動車



自転車、シェアモビリティ



歩行者

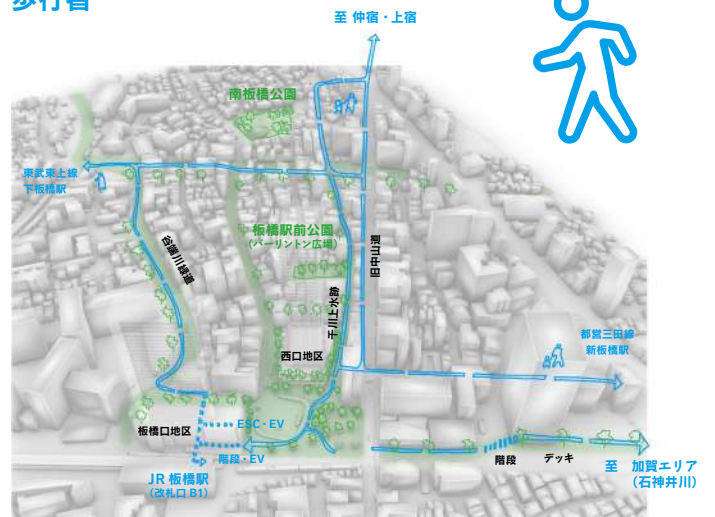


図9 | 板橋駅西口周辺エリアの将来交通ネットワーク

設計プロセス

駅前広場の使い方のアイデアを 区民の皆さんと一緒に考えてきました

令和6年度は、6月、8月、10月の計3回「板橋駅西口駅前広場の未来を考えるワークショップ」を開催しました。過年度にいただいた意見とワークショップでいただいた意見を整理し、再整備計画や設計内容に反映しました。

また、板橋口地区・西口地区の両再開発事業者ともワークショップを開催し、広場への商業からのにじみ出しやイベント開催に向けた法的整理と空間の運用方針、サインの連携等について話し合っています。利用者にとって使いやすい駅前空間とするため、今後も話し合いを重ねていく予定です。



図 10 | 駅前広場の未来を考えるワークショップの様子

2019年 板橋駅西口周辺地区まちづくり勉強会
駅前広場検討部会ワークショップ



2024年 板橋駅西口駅前広場の未来を考えるワークショップ

第1回

A ~ D の4班に分かれて、新たな駅前広場(周辺エリアも含む)で、自分で/みんなで「やりたいこと」をアイデア出して共有しました。過年度のアンケートやWSなどで得られた区民の皆様からの意見も含め、運営側でグルーピング・図式化しました。

第2回

第1回で出していた「やりたいこと」のアイデアをまとめたシートにさらにアイデアを重ねました。また、模型を囲み、具体的な場所をイメージしながら利用している姿やレイアウトを考え、そのために必要なしつらえについても意見をかわしました。

第3回

前2回のWSを通じていただいたアイデアを整理・図式化したシートと、行為や活動がプロットされた模型などをご覧頂きながら、「いいね」と思うものを皆さんと共有し、実現に向けた「課題」を出し合いました。様々な世代からの具体的な意見が議論されました。

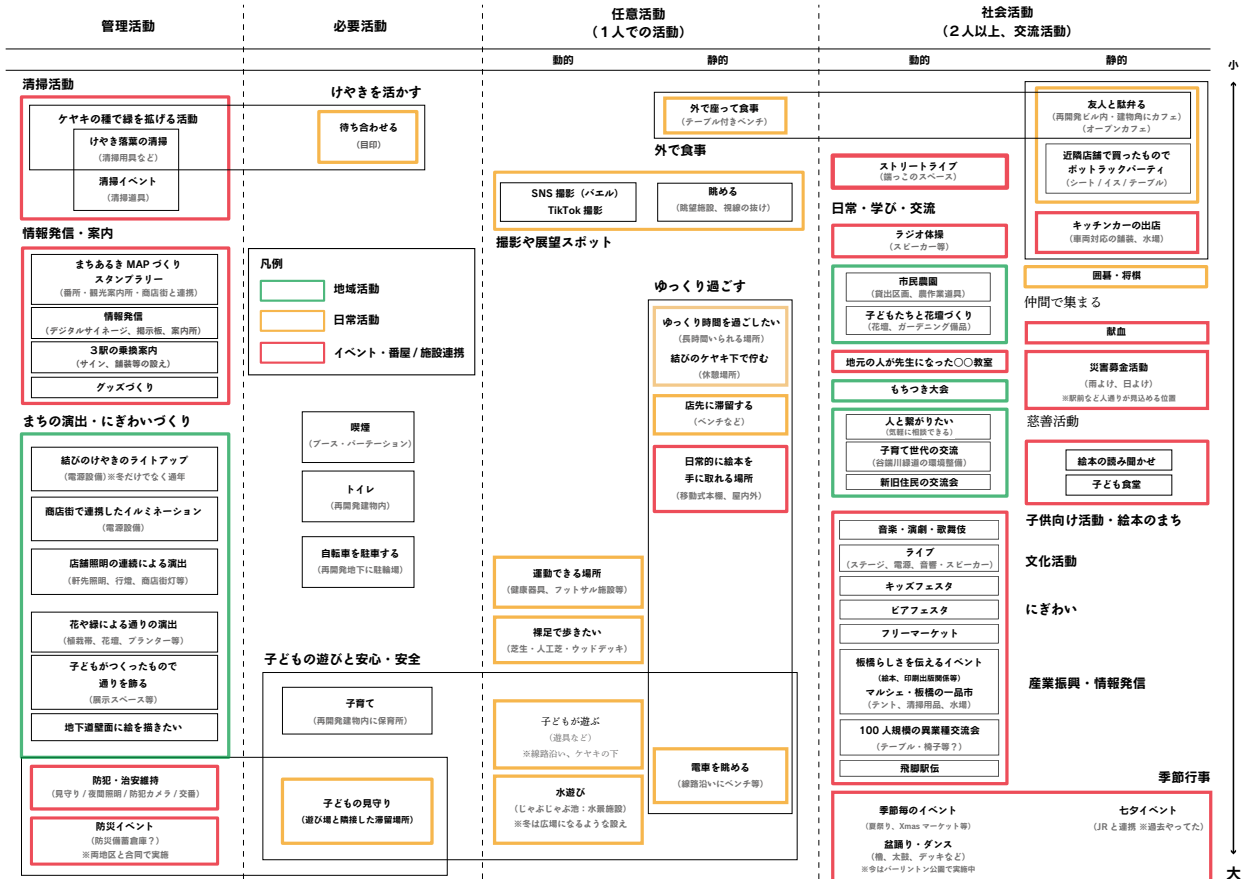


図 11 | 第3回ワークショップ資料(過年度の意見と令和6年度ワークショップでの意見の重ね合わせシート) ※板橋区役所HPからもご覧いただけます

西口周辺エリア一体整備プラン

官民境界を越えて一体化した屋外空間の実現 誰もが歩きやすく、みどり豊かな駅前エリアに

今回の再整備では、ベビーカーも、車いすも、高齢者の皆さんも、誰もが心地よく歩ける駅前を実現します。

通常の開発では、道路と建築敷地は行政と民間で所有者が異なるため、境界で区切られて別々に計画・整備されることになります。そのため、境界には排水の溝が設置され、ベビーカーや車いす利用者にとってバリアになることがあります。また、舗装の素材や色が異なったり、植栽が重複して配置されることもあります。その結果、歩行者にとって歩きにくくなり、十分なスペースが確保されないことで、植栽の生育環境も悪くなります。

歩きやすい空間を実現するために、駅前広場に隣接する板橋口地区・西口地区・きらぼし銀行地区の三地区と連携することとしました。舗装デザインを揃え、植栽を歩道と車道の間にまとめることで、豊かな植栽帯を実現します。この植栽帯が歩行者と車の間に適切な距離を確保し、歩行空間の安全性を高めます。また、建築敷地の一部の排水を道路側で処理することで、敷地境界部の排水の溝をなくし、誰もが歩きやすい歩道空間を生み出します。周辺道路においても、交通の変化を見据えて安全対策を検証し、必要な工事を行っていきます。



図12 | 官民境界を越えた屋外空間の一体整備の考え方



図13 | 通常の道路と建築敷地とが別々に整備される場合

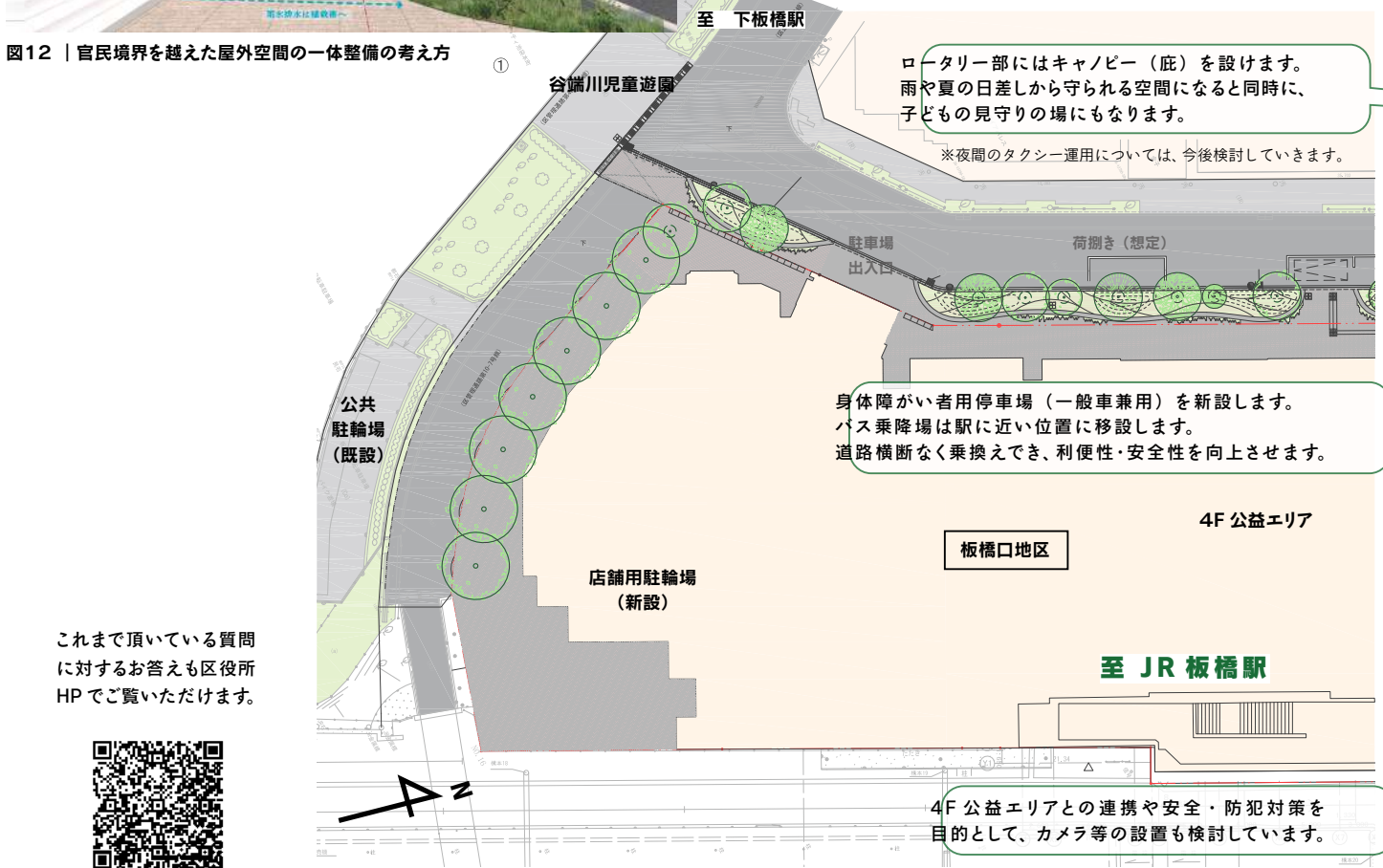


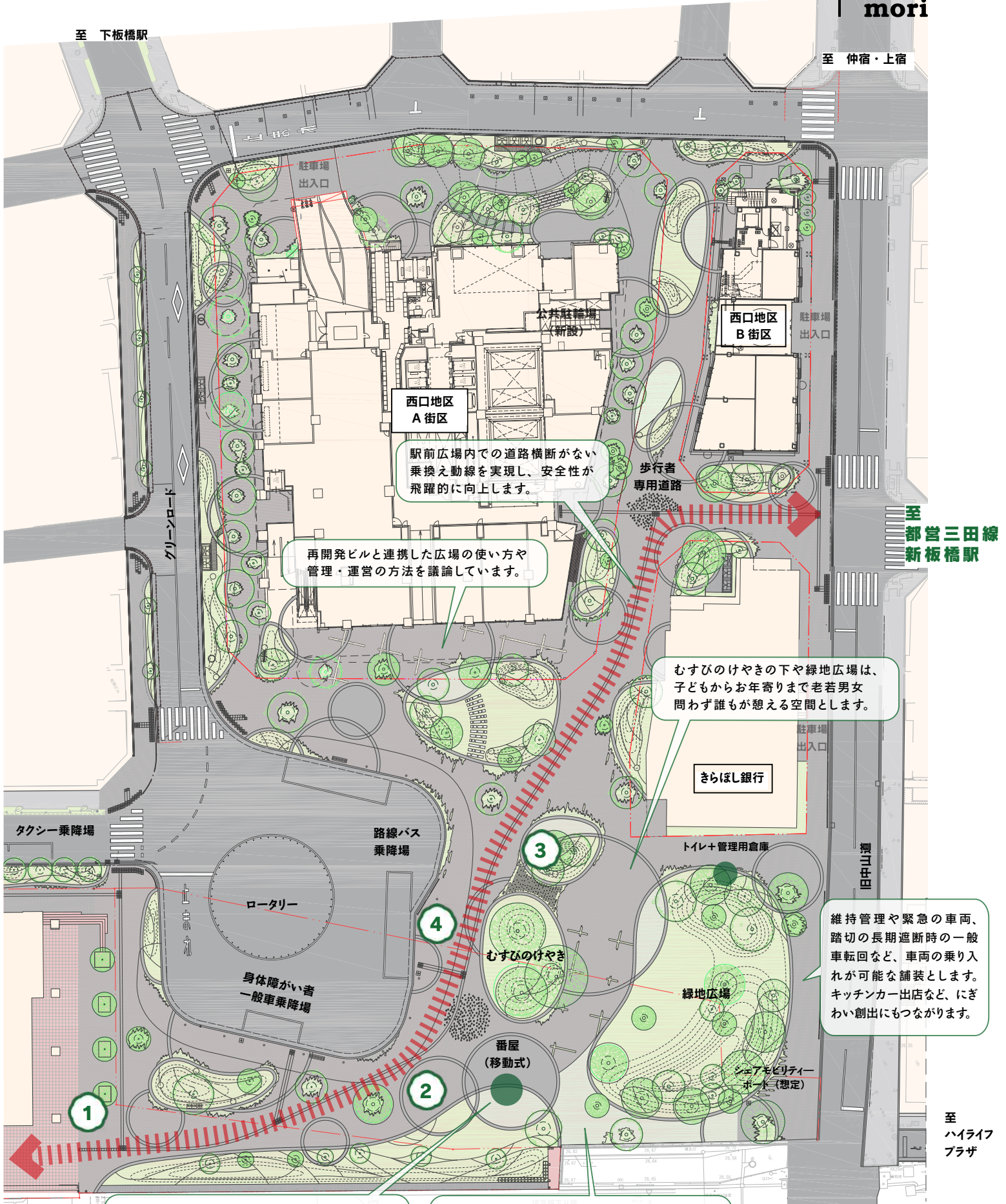
図14 | 板橋口地区・西口地区と西口駅前広場との一体整備に向けたマスタープラン S = 1/300

これまで頂いている質問
に対するお答えも区役所
HPでご覧いただけます。



至 下板橋駅

至 仲宿・上宿



西口地区 A街区

駅前広場内での道路横断がない乗換え動線を実現し、安全性が飛躍的に向上します。

再開発ビルと連携した広場の使い方や管理・運営の方法を議論しています。

むすびのけやきの下や緑地広場は、子どもからお年寄りまで老若男女問わず誰もが憩える空間とします。

維持管理や緊急の車両、踏切の長期遮断時の一般車転回など、車両の乗り入れが可能な舗装とします。キッチンカー出店など、にぎわい創出にもつながります。

公益エリアと連携する拠点施設として、移動式の番屋を設けます。
(情報揭示 + 管理用倉庫 + 見守り + 道案内 + 災害時連携)

既存駐車場を撤廃し、歩行空間への自転車の流入をなくすことで、安全な駅前広場をめざします。
(駐輪場は再開発ビル内に新設)

※基本設計段階のものであり、今後詳細設計で変更になる可能性があります。

視線に抜けをつくり、歩きやすい空間を実現します

① 乗換えがしやすい誘導のデザイン

JR 板橋駅を地上に出ると、ロータリー越しに都営三田線新板橋駅方面へ視線が抜けます。ロータリーの北側へ向かう動線を緩やかなカーブとし、人々を自然に導くことで、安心できる乗換え動線を実現します。

線路沿いの緑地は、騒音の問題や安全性にも配慮しつつ、鉄道との適度な距離感をつくり、倒木による鉄道への支障が生じないように植えかえることで、適度に視線が抜け、閉鎖的で暗いイメージにならないように計画しています。こうした計画により、見通しがよく、迷いにくい駅前になります。



図 15 | JR 板橋駅からの駅前広場

② 小さな管理拠点と樹木の継承

歩を進めると、広場の維持管理に関する情報掲示や、道具倉庫となる番屋が見えてきます。番屋は小さな管理の拠点です。日常は見守りや道案内を行い、災害時は周囲の災害対策施設と駅前広場の連携を支えます。

現在、アクセスしやすい位置にある「むすびのけやき」は、駅前広場整備当時に献木され、今ではまちのシンボルになっています。この樹木を継承し、生育環境の改善も行いながら、次の50年、100年に向けた駅前広場の風景づくりの象徴として活かしていきます。



図 16 | 番屋とむすびのけやき

③ 車道を歩道にして、安全な乗換えを

ロータリーのバス乗降場を左手に見ながらまっすぐ進むと、西口地区エリアの境界にたどり着きます。西口地区 B 街区の手前を右に曲がり、北に進むと新板橋駅が見えてきます。西口地区 A 街区と B 街区の間は現在車道となっていますが、ここは歩行者のための空間（歩行者専用道路）に生まれ変わります。こうすることで、歩行者と車が交わりにくくなり、安全に乗換えができる駅前広場となります。

駅前広場に面した屋外空間や、両側に店舗が並ぶ歩行空間は、さまざまな活用を想定しています。沿道の店舗と屋外空間が連携しながら、にぎわいのある駅前をめざし、回遊性を高めています。



図 17-2 | 現在の様子



図 17-1 | 駅前広場から歩行者専用道路へ

4

高い緑被率で、心地良い駅前を

※板橋区全体での緑被率は約 19%（令和 6 年度調査）です。
東京 23 区緑被率は、最も多い自治体でも約 25%といわれています。

「むすびのけやき」のもとにはベンチを設置します。そこは、待ち合わせやバスを待つ間などに、緑のかけで、木もれ日や四季の移ろいを感じながら一息つける場所に生まれ変わります。背後に広がるみどり豊かな開けた空間、起伏のある緑地広場が、旧中山道（車道）との関係をやわらかくつなぎます。また、このエリアは、日常では静かに過ごすことができる一方で、イベント時や災害時には周囲と連携して活用できる場所となります。

今回の再整備で、現状の緑被率*約 9%から緑被率約 34%という都内でも類を見ない駅前広場となります。必要な範囲のみを舗装し、それ以外は土や緑にすることで、夏場の地表面温度上昇を抑え、涼やかな風をまちへと送ります。また、心のみならず身体にもやさしい快適な空間をめざし、ビオトープなど子どもたちの環境教育の場としても活かしていきます。



図 18 | むすびのけやきと背後に広がる緑地広場

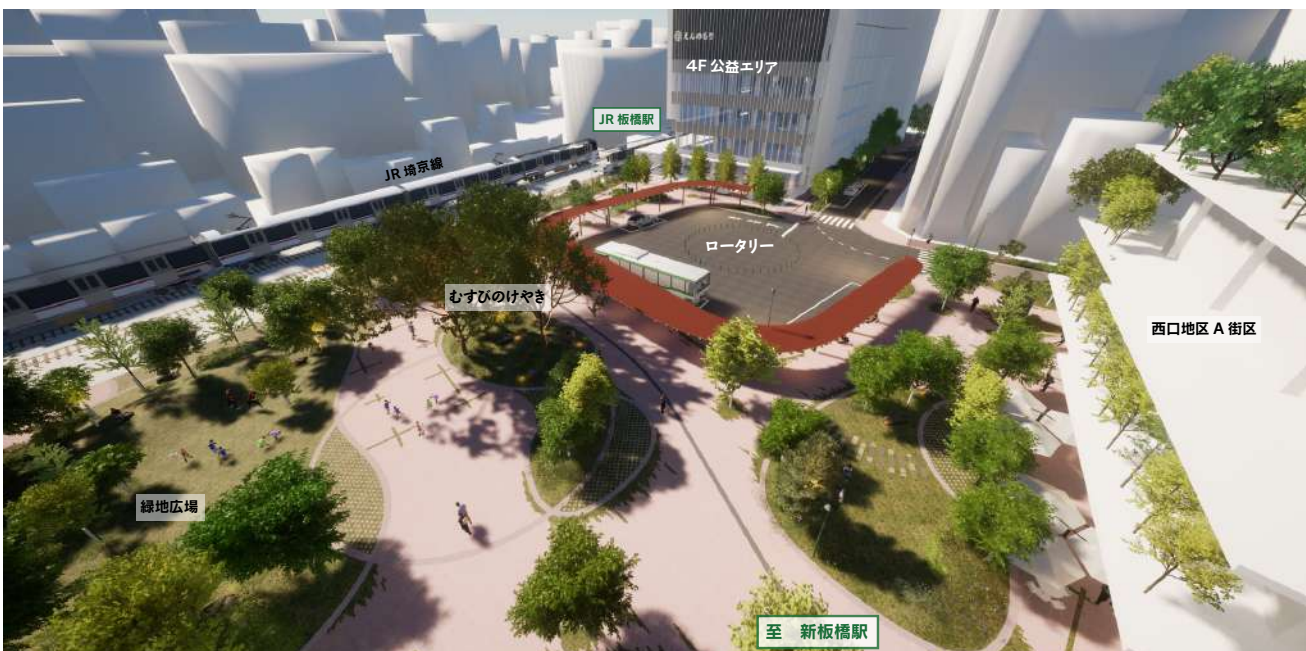


図 19 | 駅前広場の鳥瞰（北側より）

※基本設計段階のものであり、今後詳細設計で変更になる可能性があります。

デザイン方針

乗換え動線のわかりやすさと心地よさ・安心感が共存した広場

広場レイアウト

わかりやすく、心地よく、安心できる広場

JR 板橋駅側と新板橋駅方面が、互いにロータリー越しに見通せることで、乗換え動線が分かりやすくなります。複数年にわたるさまざまなワークショップの意見も踏まえ、日常におけるベンチの配置や通り道、イベント時などの使い方をシミュレーションし、全体の配置計画を行いました。それぞれの空間が視線でつながることを意識し、死角ができればなく、人の視線に見守られている感覚が安心感を生む広場のレイアウトとしました。



図 20 | 駅前の活動ごとを視認しやすい計画

植栽計画

武蔵野の植物たちでつくる風景

板橋には、北部の荒川低地、中央部の武蔵野台地、南部の中小河川と谷戸という、大きく3つの風景があり、それぞれに合った植物の環境があります。新しい駅前広場では、武蔵野にもともとあった樹木や草花を基本にしつつ、にぎわいの場の近くには園芸種も取り入れ、板橋らしさとにぎわいが共存する風景づくりをめざします。また、植栽の密度や高さのバランスを、整備後も維持管理の中で調整し続けることで、広場への愛着が育つ管理をめざします。



図 21 | 道路沿いの植栽イメージ

視覚（季節の彩り）/聴覚（葉音）/嗅覚（香り）/触覚（手触り）/味覚など五感を刺激する記憶に残る風景体験を生み出す

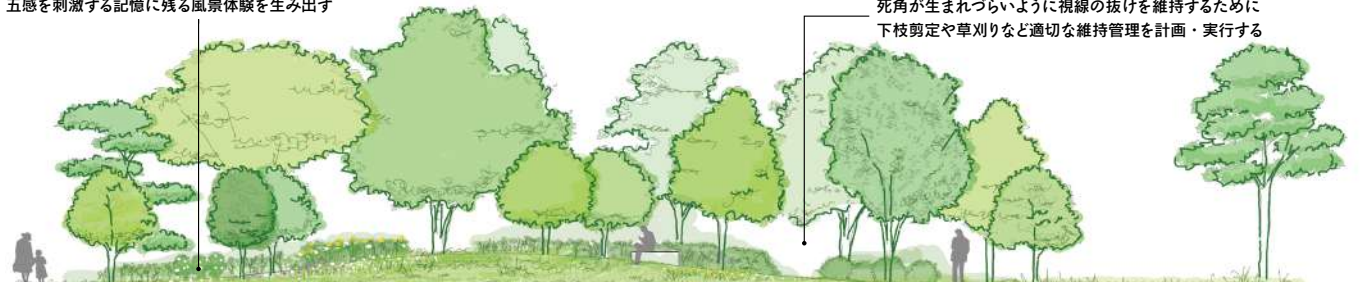


図 22 | 立体的な植栽密度感のコントロール（緑地広場部立面イメージ）

防災・減災

災害に備える広場となるために

新たに整備する緑地は、雨水を受け止める役割も担います（計画以上の降水量があった場合に余剰排水を受け取る役割）。都市型災害への備えとして、災害時には情報を発信したり、一時的に人が待機したりできる広場となります。また、番屋を中心にして、両再開発の一時滞在施設や帰宅支援対象道路である中山道とも連携できるようにします。



図 23 | 災害時の周辺再開発建物と駅前広場の連携イメージ

マテリアル・カラースキーム

地域に根付いてきた色彩を活用

色彩の調査で分かった旧中山道沿いの地域の特徴的な色の傾向（赤系の色がよく見られる）を踏まえ、板橋駅西口周辺エリアのコンセプトカラーに「赤銅色（しゃくどういろ）」を選びました。舗装は、赤系のインターロッキングブロックや石材を採用します。照明柱、柵、番屋などの立ち上がりの施設群は、背景となる緑になじむグリーングレーで統一し、落ち着きと温かさのある駅前をめざします。



図 24 | 使用を検討している素材のサンプルボード

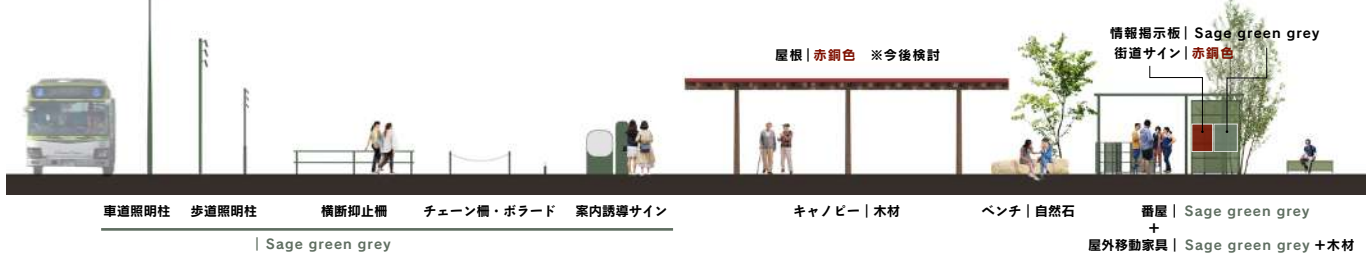


図 25 | 駅前広場にてできるストリートファニチャーの統一感ある色彩計画

サイン計画

シンプルでわかりやすい案内

空間の見通しのよさによる分かりやすさに加え、乗換えや駐輪場への案内・誘導のために、シンプルで分かりやすい案内誘導サインを計画します。

また、「旧中山道の第一の宿場町」という歴史を感じられるように、「街道サイン」を導入し、旧中山道沿いのエリアや、その背後に広がる加賀エリアへと誘います。

案内誘導サイン（ベースカラー）
RAL 150 50 10
グリーングレー
Sage green grey

街道サイン（コンセプトカラー）
日塗工 :07-30L (マンセル値 7.5R3/6)
しゃくどういろ
赤銅色

W (短辺)
1 : 1 : 1
R = W/3
緑の円

MAP
BUS

あいうえお
アイウエオ
abcdefghijkl

- A. ベースカラー
- B. サイン形状ルール
- C. 書体

図 26 | サインの考え方（色・形状・書体の統一）

照明計画

安心感のある立体的な灯り

歩きやすくなる路面への灯りと、ベンチや樹木などの居場所の灯りを組み合わせた立体的な照明計画により、安心感のある夜間の空間づくりをめざします。また、深夜帯はエリア全体で減光に取り組むことで、環境にも配慮した計画とします。



図 27 | 夜間の照明計画イメージ

えんのもりスクール

区民、事業者、設計者、区職員が 混ざり合って、みんなで議論。

完成後の広場や施設を、どんなふうに使っていくのか、運営・管理をしていくのか。そのことを計画段階から考え、設計に取り入れていくために、令和7年度から「えんのもりスクール」という“学びの場”を設けました（令和7年度は計5回開催。令和8年度以降も継続的に実施予定）。再開発と一体となった豊かな環境づくりに向けて、施設や空間の計画を進めると同時に、完成後の空間の「つかう」方法や「まもる」ための仕組みづくりを、区民、事業者、設計者、区職員が共に学び、議論しながら見つけていきます。この学びの場を起点に、人と人をつなぎ、「まちのためにできること」を一つひとつ積み重ねながら、地域の運営体制（エリアプラットフォーム）づくりを段階的に進めていきます。実際に、スクール参加者がコアメンバーである市民団体（板橋駅まちづくり応援団）による、清掃活動や交流会といった活動も始まっています。



= 学びの場

えんのもり
スクール
en no mori school

「まちづくりに関するレクチャー」
「使い方のワークショップ」
「緑のイベント・まちあるき」

各回の開催レポートで
イベントの概要をご覧ください。



図 28 | レクチャーイベントの様子（講師：ツバメアーキテクト、いたばしプロレス）



図 29 | 緑のイベントの様子（講師：グリーンワークス）



図 30 | ワークショップの様子（令和7年度使い方ワークショップは計4回実施）



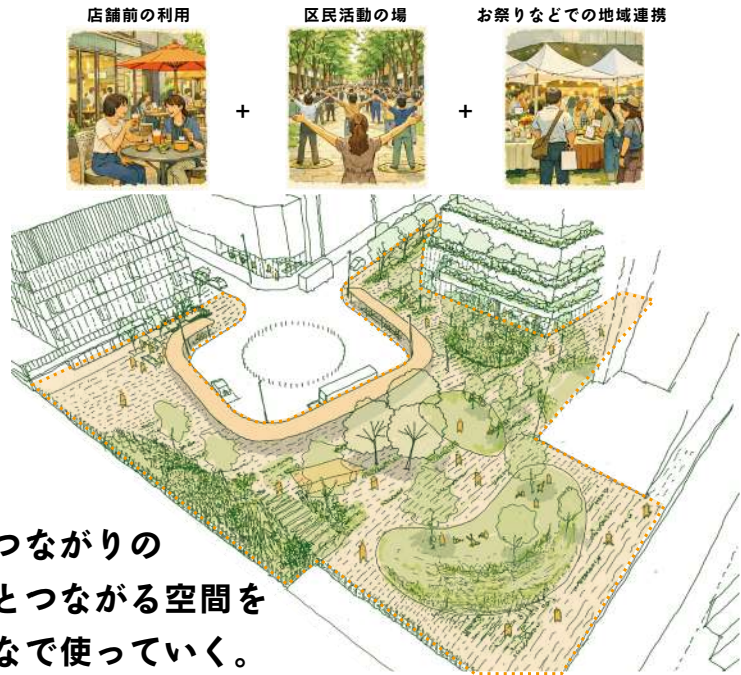
図 31 | まちあるきイベントの様子（講師：Veig）

一体的利用と維持管理スキーム

みどり豊かな駅前環境の価値を 地域と再開発とが共に育てていく。

一体的活用スキーム

西口駅前広場の再整備によって、板橋口地区と西口地区がひとつながりの空間となります。駅前に新たに広がる一体空間は、区民の誰もが活用できる新しいフィールドです。沿道店舗の店先の利用、区民活動での利用、お祭りなど地域と連携した活用など、この空間をみんなで活かして使っていただける場所になればと考えています。どんな使い方がされていくとよいか、今後も皆さまのご意見をお聞かせください。



ひとつながりの
地域とつながる空間を
みんなで使っていく。

図 32 | 一体的活用のイメージ。複数の同時開催もできる

公民で連携した 維持管理スキーム

ひとつひとつの居場所がたくさんある緑豊かな駅前を継続していくために、維持管理の基盤をつくります。一体整備によって生み出された屋外空間をみんなで使っていくと同時に、区民はもちろん、民間企業、行政、商店街、町会、エリマネジメント活動など、さまざまな担いが連携して役割分担を行っていきます。さらに、広場のみどりを育てる活動に、誰もが義務感なく自由に参加できる開かれた場を用意することで、みんなで豊かな環境を守っていく仕組みを考えています。できるだけ楽しく関わりが広がり、魅力的な緑が育ち、維持されていくスキームをつくりあげていきます。

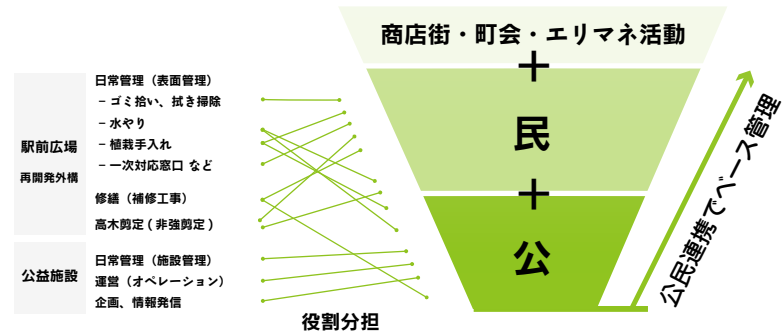


図 33 | 公民で連携した維持管理スキームのイメージ

今後の整備スケジュール

板橋駅西口周辺エリアでは、板橋口地区と西口地区の再開発事業が進んでいます。まず2027年に板橋口地区4階の公益エリアが先行して完成し、同年に、板橋口地区全体（住宅や商業施設等を含む）も完成します。

西口駅前広場の再整備は、2026年の実施設計を経て、2027年以降に工事に着手し、2029年の完成を予定しています。その際は、西口地区も含めた西口周辺エリア全体の「まちびらき」を行うことをめざしています。

	2025 (令和 7)	2026 (令和 8)	2027 (令和 9)	2028 (令和 10)	2029 (令和 11)	2030 (令和 12)
板橋口地区 再開発事業	R4.12~工事着手	建築本体工事	完了			
公益エリア (板橋口4階)	設計	工事	開設			
西口地区 再開発事業	解体工事		工事			完了
西口駅前広場 再整備	整備計画	実施設計	工事			整備完了

図 34 | 今後の整備スケジュール



発行 | 板橋区 まちづくり推進部 地区整備課

発行日 | 令和 8 年 4 月

電話 | 3579-2556

刊行物番号

R08-10